

## 山口市湯田楠木町遺跡出土の古式土師器

田畑 直彦

はじめに

山口県内では弥生時代後期から古墳時代初頭の土器編年案がいくつか提出されているが、良好な一括資料が少ないため、その様相は他府県に比べて不明確である。この状況において、1974年に山口市教育委員会によって調査された湯田楠木町遺跡出土土器は、数少ない良好な資料と言える<sup>1)</sup>。本資料は、1979年に小田富士雄氏・佐原眞氏によって長門の土井ヶ浜Ⅳ式<sup>2)</sup>、周防の吹越式<sup>3)</sup>に後続する庄内式併行の最古の土師器とされた<sup>4)</sup>。その後、1981年に、山本一朗氏によって庄内式併行の防長10式終末に位置付けられた<sup>5)</sup>。近年には豆谷和之氏により、布留式古相に位置付けられることが指摘された<sup>6)</sup>。しかし、概報に掲載されている実測図の縮尺が小さいことなどから、資料として使用するには困難な状況にあった。今回、筆者は山口市教育委員会から再実測と報告の許可を得ることができたので、山口県内における古式土師器の基準資料として紹介し、同時期の土器についても考察する。

### 1 遺跡の概要

湯田楠木町遺跡は山口県の中央部、山口盆地の樫野川右岸の旧朝倉川の扇状地上に位置する。現在の国道9号線沿いは扇状地の扇端の湧水点にあたり、同9号線から南側には水稲耕作に適した低地が広がる。これらの立地を生かして、付近一帯は古くから開発が進んだ地域であった。本遺跡の西に隣接する赤妻遺跡は、弥生時代から中世にかけての複合遺跡で、弥生時代前期の土坑、庄内併行期の住居跡などが検出されており、包含層からは弥生時代前期～終末期の土器が大量に出土している<sup>7)</sup>。古墳時代においては、本遺跡から西に約500mの地点に、5世紀前半に比定される赤妻古墳が所在する。この古墳は主体部から位至三公鏡をはじめとする多くの副葬品が出土したことで知られている<sup>8)</sup>。奈良・平安時代においては、赤妻遺跡で大量の須恵器や製塩土器、緑釉陶器が出土しており、周辺に吉敷の地名も残ることから、遺跡の一帯は古代における吉敷郡衙の有力な推定地である<sup>9)</sup>。この他に、樫野川右岸には朝田墳墓群や下東遺跡、天神山古墳群など大規模な遺跡が多く、一

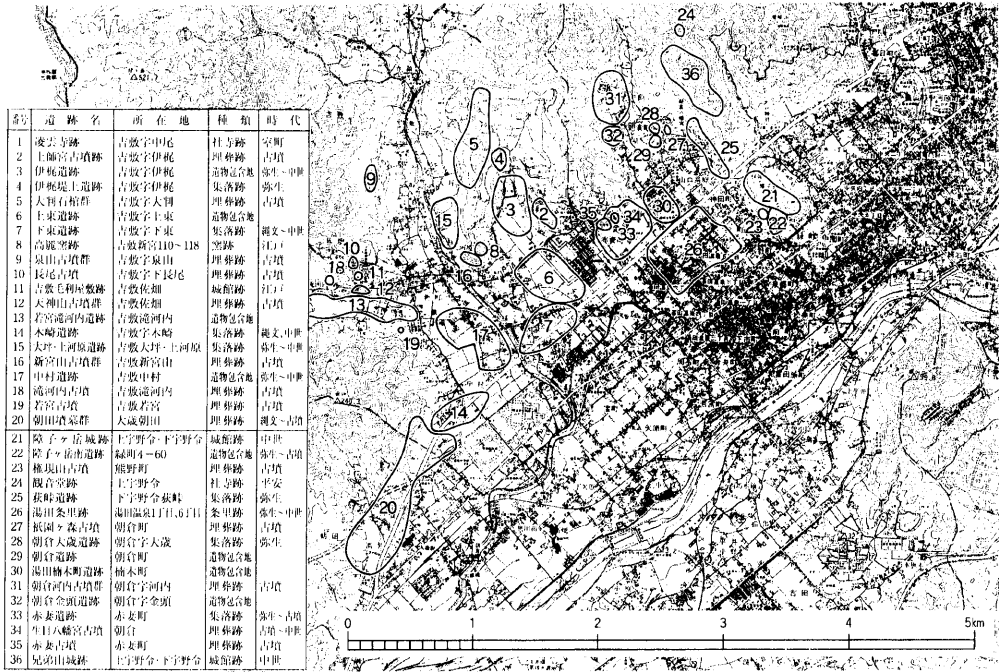


Fig.132 山口盆地北半の主要遺跡分布図（増野編1997を一部改変）

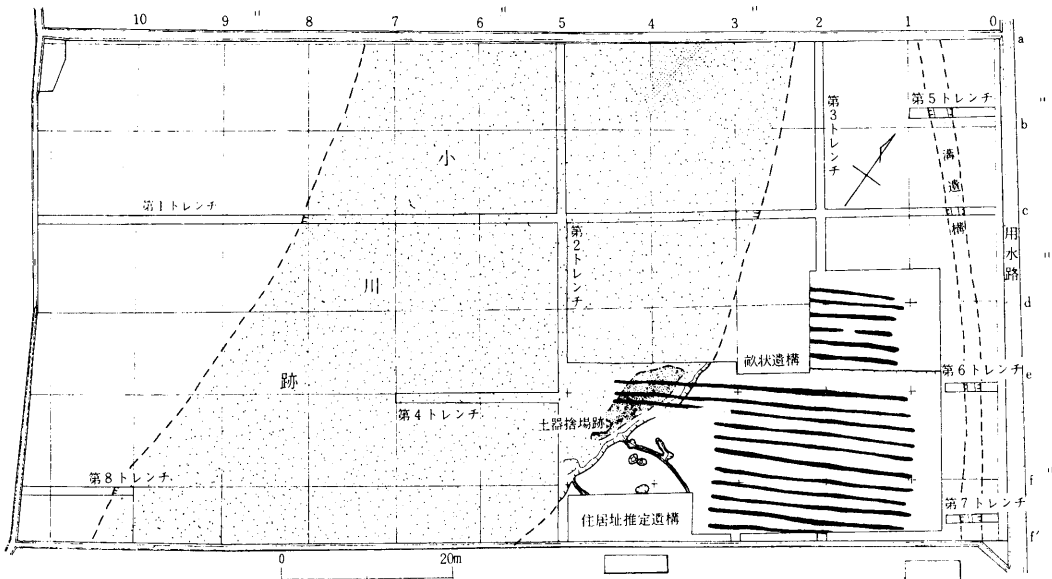


Fig.133 湯田楠木町遺跡調査区位置図（内田他1975を一部改変）

貫して山口盆地の拠点的な地域であった<sup>10)</sup> (Fig.132)。

発掘調査では、縄文時代後～晩期から古墳時代の河川跡、古墳時代前期の住居址推定遺構と土器捨て場跡、中世の畑と推定される畝状遺構、溝などが検出された。今回取り上げる古式土師器は、河川跡の東肩から約1～5mの範囲、約40m<sup>2</sup>の傾斜面において、河川跡の埋土である黒褐色シルト層を掘削中に検出された。出土土器には少量の須恵器も含まれていたが、小片で摩滅しており、河川跡の遺物が混入したものとされた。

## 2 土器捨て場跡出土土器の現況

今回、山口市教育委員会文化財保護課の収蔵庫で保管を確認できた古式土師器は、パンケース5箱分、51個体分である。そのうち、写真や実測図で概報掲載土器と判断できたものは38個体、未掲載土器が13個体である。Tab.10に「概報写真」があるものは概報の写真図版で、そうでないものは実測図で判断しているので参照されたい。概報では99個体の実測図が掲載されているが、残念ながらそのうち半数以上の所在が不明である。混入したとされる須恵器の所在も不明である。概報の記述及び未掲載土器の割合から考えると、本来、図化可能な土器は130～140個体程度存在した可能性が高い。今回の検討で、新たに接合する土器、接合はしないが、接着剤の剥離痕がみられる土器を確認した。

また、他遺構出土遺物の混入の可能性があるため、注記を検討した。注記はYK-1の調査名、土器捨て場跡の位置するE-4・5の地区名、取り上げ番号があるものが最も多い。トレンチVIとあるFig.140-37は試掘調査時の出土と考えられる。以下、日付は5月29日から6月9日まで存在する。注記の「NO」は取り上げ番号で、日毎で番号をつけて土器を取り上げたようである。また、5月29日から6月4日までの地区名がE-4、それ以降がE-5になっており、土器の取り上げは東から順に行われたのであろう。注記で土器を分類すると以下のようになる。①YK-1(調査名)E-4・5(地区名)、NO(取り上げ番号)のあるもの、②YK-1(調査名)E-5(地区名)とあるもの、③YK-1(調査名)土器捨て場跡の注記を持つもの、④YK-1(調査名)があり、以下判読できないもの、⑤YKG-8とあり、土器捨て場跡ではない注記のあるもの、⑥注記のないもの。

このうち、他遺構の混入の可能性があるのは⑤・⑥である。⑤は8が該当する。しかし、土器捨て場跡出土土器として遺物写真がある。⑥は5・10が該当する。10は土器捨て場出土土器として遺物写真がある。以上、注記と遺物写真から、5を除くといずれも土器捨て場跡出土と考えられる。5も他と同時期であり、土器捨て場跡出土の可能性が高い。

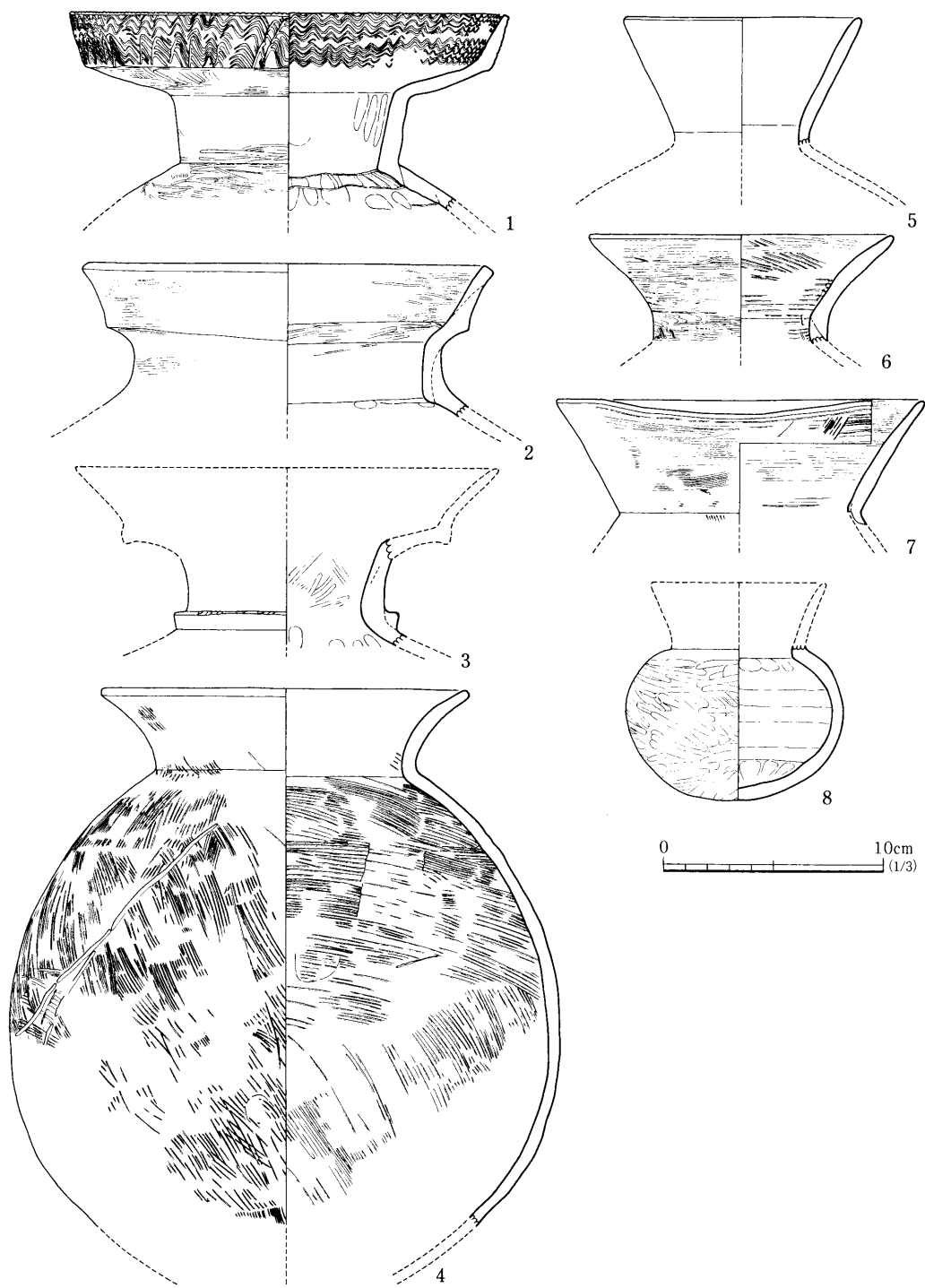


Fig.134 湯田楠木町遺跡出土の壺(1)

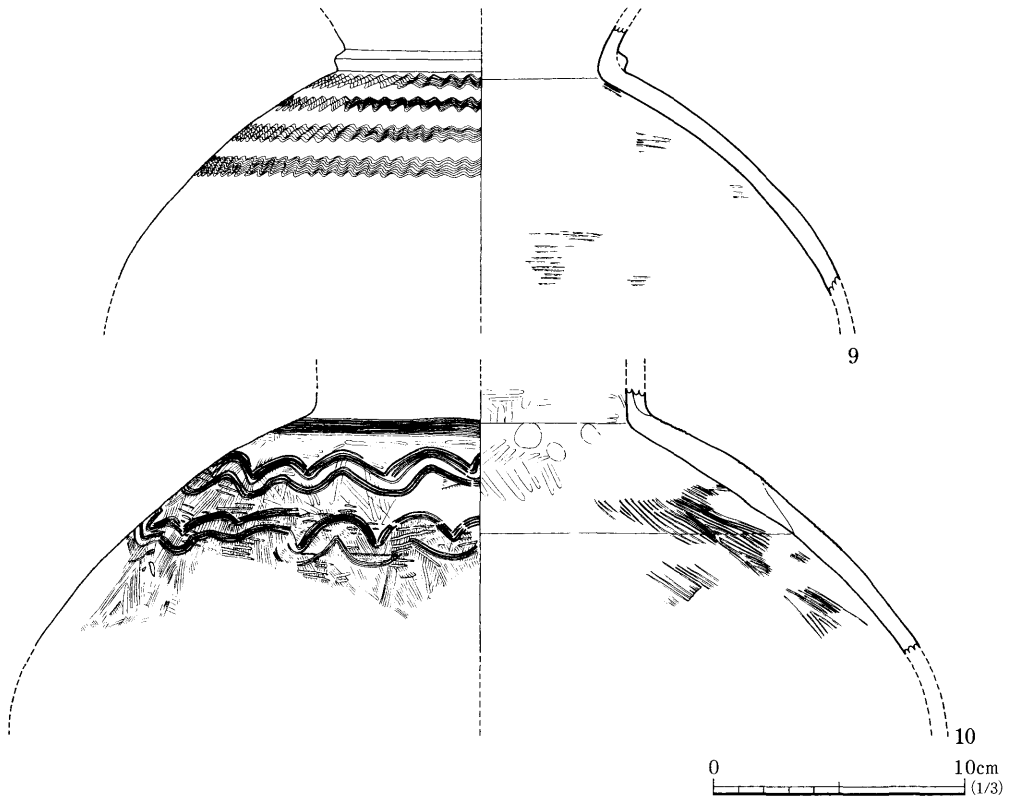


Fig.135 湯田楠木町遺跡出土の壺 (2)

### 3 土器捨て場跡出土土器

#### (1) 壺 (Fig.134・135・136-1~11)

1~3は二重口縁壺である。1は口縁部内外面に4条・5条単位の櫛描文を施し、口唇部には刻みを施す。頸部~胴部外面にはヨコミガキを施す。胴部内面には粘土帯接合痕が明瞭に残り、指頭痕が認められる。2は口縁部の立ち上がりが短く、歪みがみられる。3は二重口縁壺の頸部の破片である。1条の刻目突帯を持ち、内面は外への屈曲部を残す。4は広口壺である。口縁部は大きく外反し、胴部は球形である。胴部外面にはタテハケ、内面は、上半がヨコハケ、下半が左上がりハケである。5は長頸壺、6・7は直口壺である。7は口縁部の一部が注口状になる。8は小型丸底壺の底部である。前述のように混入の可能性がある。9・10は二重口縁壺の胴部である。9は頸部に1条の貼付突帯、胴部に8条単位の櫛描文を4段施す。外面の風化が激しく調整は不明。10は胴部に左上がり及び平行タタキの後、タテハケを施す。その後、7・8条単位の櫛描波状文を2段に渡って施す。

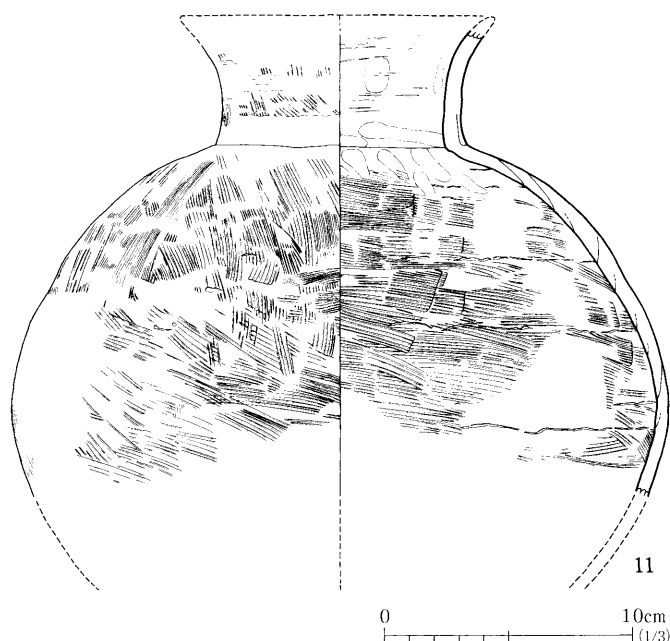


Fig.136 湯田楠木町遺跡出土の壺(3)

11は直口壺である。口縁端部が欠損している。胴部外面は左上がり及びタテハケを施す。胴部内面は接合痕が残り、ヨコハケを施す。口頸部界の内面には顕著に指頭痕がみられる。

(2) 甕

(Fig.137・138-12~25)

甕の分類は久住氏の分類<sup>11)</sup>を参考に行った。

a 在地系甕 (Fig.137-12~14)

在地系甕は舌状口縁で体部が倒卵形、ハケ仕上げの

弥生時代終末の系譜をひく甕で、口縁部のヨコナデやケズリに布留系甕の強い影響が認められる。12~14は口縁部内外面にヨコナデを施す。13は口縁部の粘土帯接合痕が段状に残り、胴部外面はタテハケを施す。内面は接合痕と指頭痕が顕著に残る。

b 伝統的V様式系甕 (Fig.137・138-15~24)

伝統的V様式系甕は口縁部が短く、直線的に外反し、外面に平行ないし左上がりのタタキを施す。15は口縁部先端を強く折り曲げており、内面には明確な稜線を持つ。口縁部はヨコナデを施す。胴部外面はタタキをわずかに残し、タテハケ、内面は右上がり及び右方向のケズリを施す。このため器壁は他と比べて薄い。口縁部のヨコナデや体部外面のタテハケ、球形の器形に布留系甕の影響を受けている。16は口縁部内外面にヨコナデを施し、胴部外面に粗い平行タタキを施す。胴部内面には茎状工具による粗いナデを施す。17・18は口縁部内外面にヨコナデを施し、口縁部内面には粘土帯接合痕が段状に残る。胴部内外面はナデを施す。19は口縁部を強く折り曲げる。球形で丸底。口縁部外面はヨコナデ。内面にはヨコハケを施す。胴部外面にタテハケを施す。内面は上方向のケズリの後、タテハケを施す。20は胴部上半に右上がりのタタキを施し、下半はタタキをナデ消す。

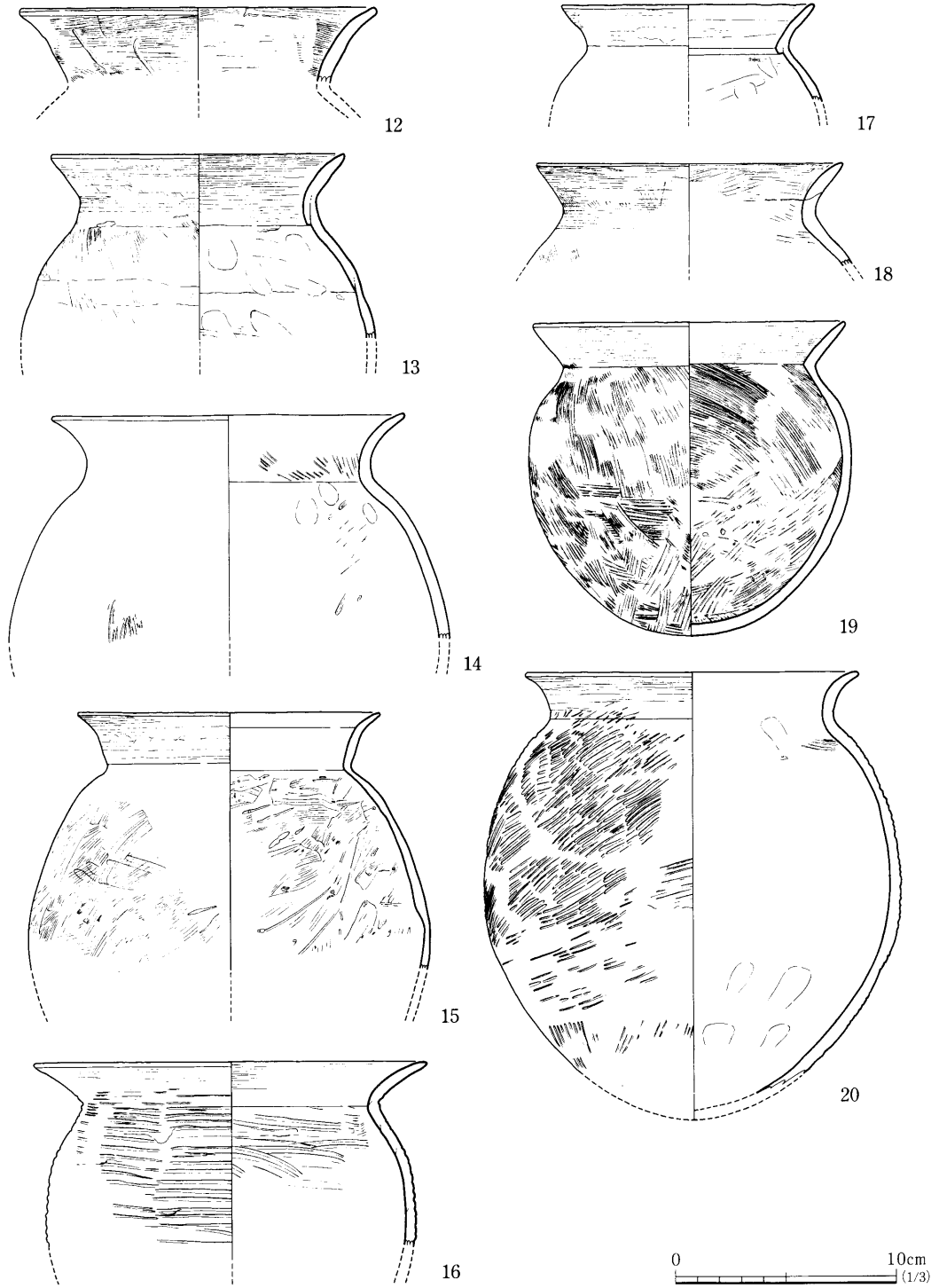


Fig.137 湯田楠木町遺跡出土の甕(1)

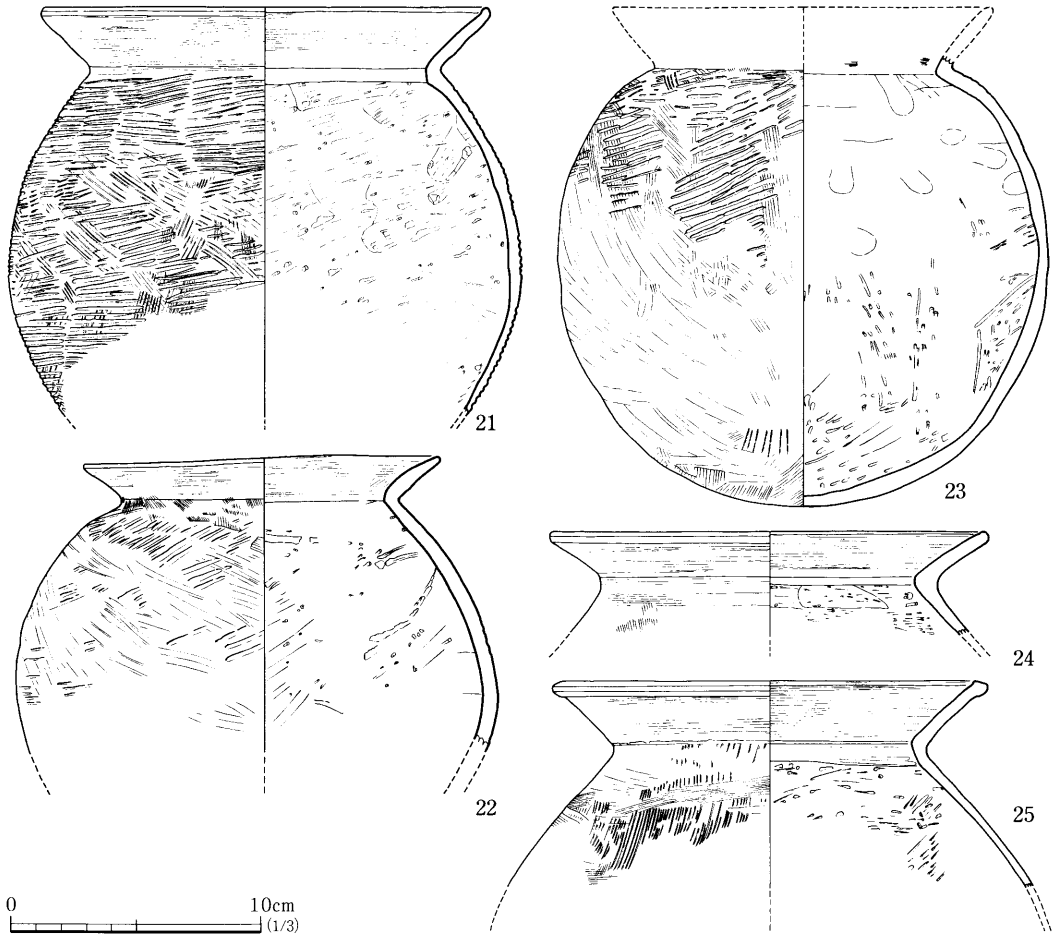


Fig.138 湯田楠木町遺跡出土の甕 (2)

21は口唇部上端をわずかに肥厚させる。口縁部内外面には丁寧な回転ヨコナデを施す。胴部外面には平行ないし右上がりのタタキを施し、下半はタテハケにより消している。内面は右上がりのケズリを左から右方向に施す。22・23は右上がりのタタキを施し、タテハケ、ナデで消している。内面は右上がりのケズリを施すが、21に比べてケズリは荒く器壁は厚い。

c 布留系甕 (Fig.138-25)

24・25は布留系甕である。25は口縁部の内面を肥厚させている。頸胴部界の屈曲は鋭く、口縁部内外面には回転ヨコナデを施す。胴部外面はタテハケの後ヨコハケ・ナデを施す。内面は右上がりのケズリを左から右方向に施す。今回確認した布留系甕はこの2点のみであるが、概報には他に25と同様の口縁部が3点掲載されている。



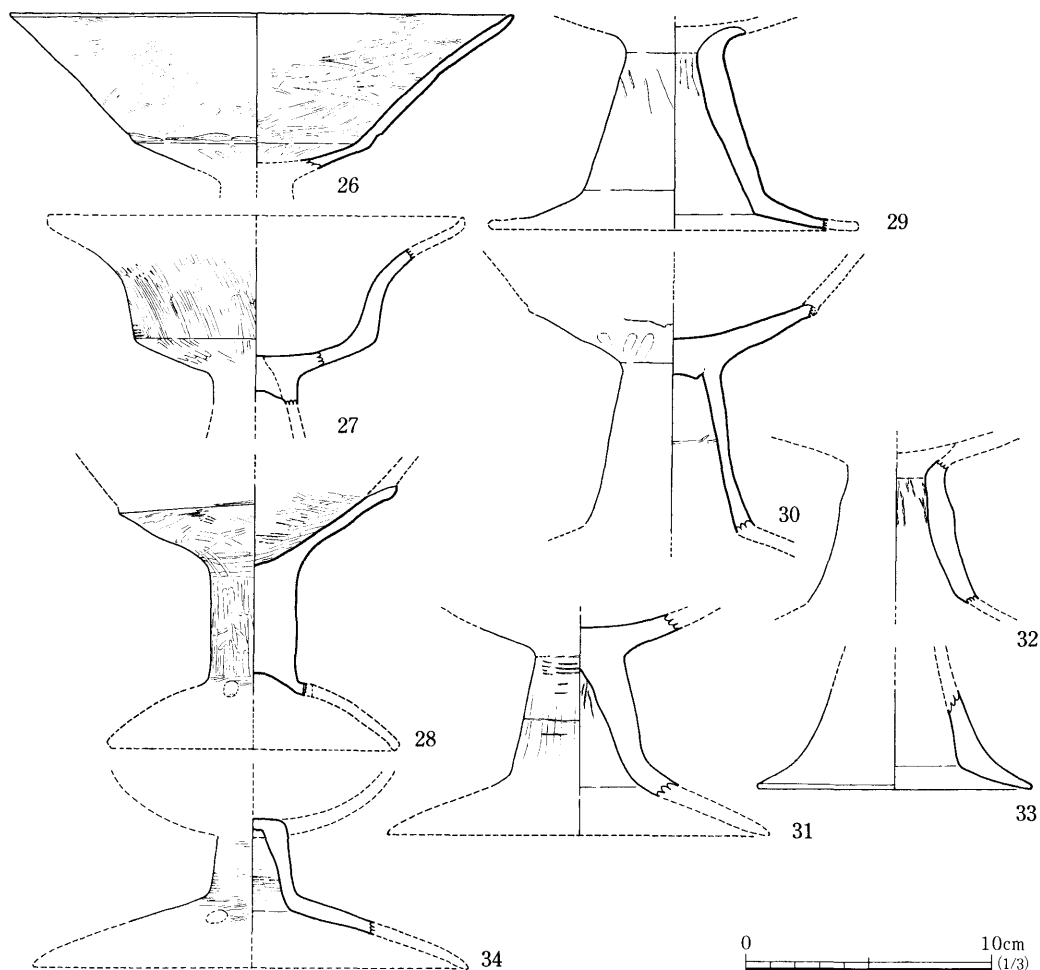


Fig.139 湯田楠木町遺跡出土の高坏

## (3) 高坏 (Fig.139-26~34)

26は布留系高坏の坏部である。口縁部は大きく外反し、先端がわずかに内湾する。内外面に細かなヨコミガキを施す。精製器種B群<sup>12)</sup>の技法であるが、胎土中には比較的砂粒を含む。概報には同様な坏部が他に2点掲載されている。27は坏部上半で屈曲する高坏である。下半は接合しない同一個体片を合成している。28は脚部が中実の伝統的V様式系高坏である。坏部上半の接合面で剥離している。29~32は坏~脚部である。いずれも風化が激しい。34は小型高坏の脚部である。坏部との接合面で剥離している。裾部に1ヶ所穿孔する。精良な胎土で、精製器種B群に相当する。33は高坏の裾部である。裾部が短く肥厚していることから、古墳時代中期の混入の可能性が高い。

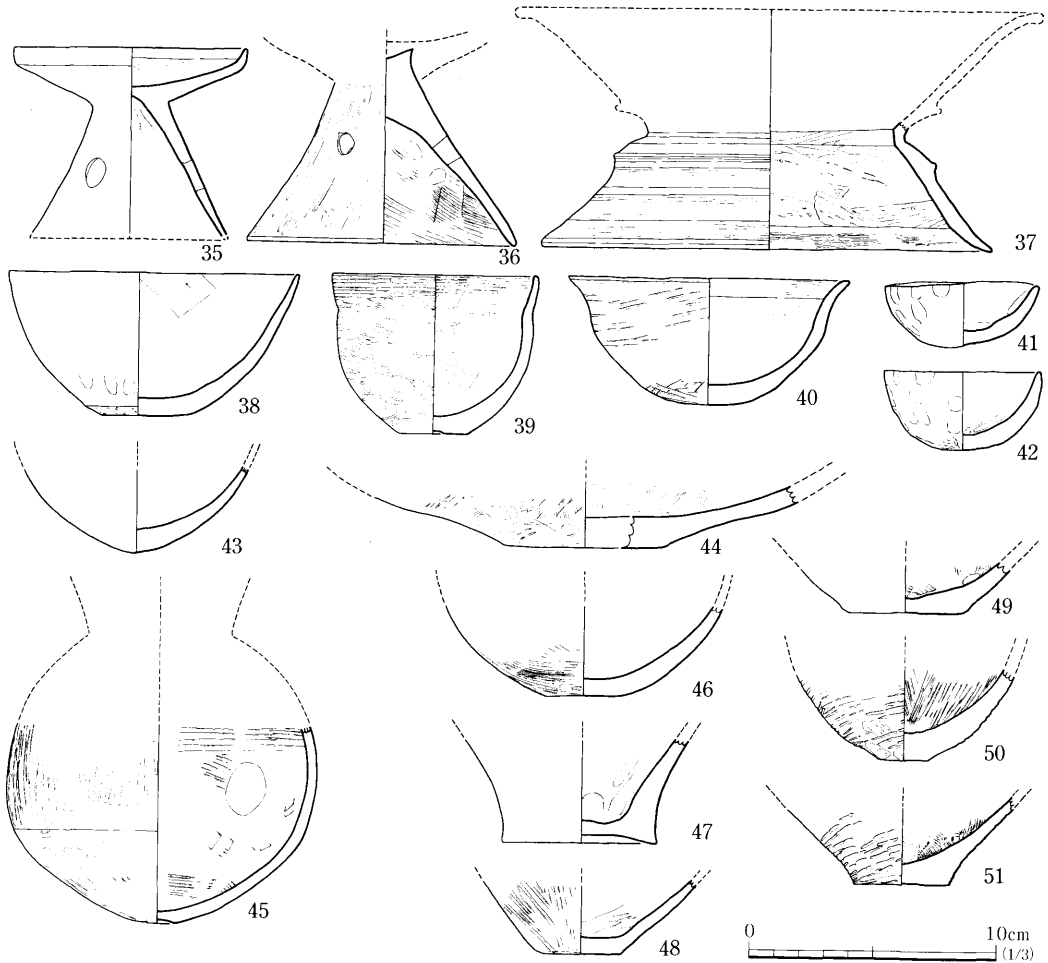


Fig.140 湯田楠木町遺跡出土の器台・底部

(4) 器台 (Fig.140-35~37)

35・36は小型器台である。35は口縁部が短く外方へ立ち上がる。脚部には1ヶ所穿孔する。精良な胎土で、内面にヨコミガキを施す他は調整は不明。その特徴から纏向編年の纏向Ⅲ式後半<sup>13)</sup>、纏向4類<sup>14)</sup>、布留0式<sup>15)</sup>に併行すると考えられる。37は山陰系鼓形器台である。上半を欠損している。底径が小さく、胎土においても他の土器と特に変わらないので、在地で製作された可能性が高い。残存器高は5.3cmである。藤田憲司氏にしたがい、くびれ部の上半と下半の誤差を1:1~1:3とすると<sup>16)</sup>、器高は10.6~12.2cmと推定できる。くびれ部径は10.5cmで、高さ/くびれ部径は1.0~1.2となり、かなり扁平である。藤田氏のV期、いわゆる小谷式の段階に相当し、布留I式、纏向4類に併行すると考えられる。

(5) 鉢 (Fig.140-38~42)

38は直口で平底の鉢、39は口縁部が内湾気味に立ち上がる。外面に細かなヨコミガキを施す。精製器種B群の技法であるが、胎土中には比較的砂粒を含む。40は小型丸底鉢である。41・42はミニチュアの鉢である。手づくねで製作されたもので、内外面に指頭痕を多数残す。

(6) 鉢・壺底部 (Fig.140-43~46)

43は底部がやや尖る。壺もしくは鉢の底部と考えられる。44は大型壺の底部である。45は底部は小さく凹底で、胴部下半で屈曲して立ち上がる。外面はタテハケの後タテミガキを施す。内面はヨコハケ後ナデ。長頸壺の底部か。46は底径が小さく、壺もしくは鉢の底部と考えられる。

(7) 甕底部 (Fig.140-47~51)

47はやや上底の底部である。弥生時代中期のもので、混入であろう。48・49は、かなり明確な平底であることから在地系甕の底部の可能性もあるが、弥生時代後期の混入である可能性が高い。50・51は伝統的V様式系甕の底部である。ともに小さな平底である。50は外面にやや右上がりのタタキを施す。内面はタテハケ及びタテミガキを施す。51は外面に右上がりのタタキ、下半は下から上へケズリを施す。内面にはタテハケを施す。

#### 4 編年的位置とその特徴

土器は畿内系が主体で、他の系統は少量の在地系の甕と山陰系鼓形器台が1点含まれるに過ぎない。甕には伝統的V様式系が多い。布留系の土器は甕、高坏、器台があり、伝統的V様式系、在地系の土器に大きな影響を与えている。時期的には、小型器台や山陰系鼓形器台から、纏向3式の後半～纏向4式、纏向4類、寺沢編年の布留0式後半～布留I式前半に併行するものと考えられる。東部では若干の混入がみられるが、下東遺跡YD-1・<sup>17)</sup>4出土土器がほぼ同時期と考えられ、布留系の甕の影響を受けた伝統的V様式系の甕、在地系の甕が出土している。県西部では、吉永遺跡Ⅲ-東地区SB-3・<sup>18)</sup>5、吉田馬場遺跡A地区LD009・010<sup>19)</sup>、秋根遺跡LD066第1層<sup>20)</sup>、延行条里遺跡IXa層<sup>21)</sup>、秋根遺跡LK091・72・80、下七見遺跡I第7地区SB-1・SD-02<sup>22)</sup>出土土器が同時期と考えられ、山陰系の土器が多数出土している。

しかし、これらの資料には精製器種がほとんどなく、布留系を模倣するものと在地系や伝統的V様式系の土器が多い。この状況において、湯田楠木町遺跡出土土器の様相は特異

である。山口盆地では前方後円墳の出現は5世紀前半の新宮山古墳<sup>23)</sup>が最古であり、それまでは主に箱式石棺などを主体部とする方形台状墓が営まれている<sup>24)</sup>。副葬品も鉄器や小型の鏡を持つ程度で、弥生時代以来の地域色を強く保持している。その一方で、甕のみならず、精製器種も揃った布留系の土器群の出現をどう捉えるべきであろうか。精製器種や他と明確に異なる胎土を持つものは、土器製作者の移住や搬入によるものと考えられる。山口盆地の勢力は地域色を保持しつつ、周防灘沿岸の制海権を掌握し、「正始元年」銘の三角縁神獣鏡を有する県内最古の前方後円墳である竹島御家老屋敷古墳<sup>25)</sup>を築いた畿内系の勢力と早い段階から密接な関係にあったのであろう。

## 5 山口県内における弥生時代終末期～古墳時代前期の土器について

近年、西部では、土井ヶ浜Ⅳ式と秋根の間、東部では吹越式と湯田楠木町間の庄内式新相に併行するまとまった資料が柳瀬遺跡E地区LS005<sup>26)</sup>で出土している。在地系の甕(Fig.141-4・5)には前段階までみられた甕内面のケズリがなく、ヨコハケ・ナデを施す。外面のタタキとともにV様式系甕の影響が考えられる。伝統的V様式系甕(Fig.141-6)は胴部が球形、尖底で口縁部が短く直線的に外反する。胴部外面は、平行タタキの後、タテハケを施す。在地系高坏(Fig.141-9・10)は、吹越式・土井ヶ浜Ⅳ式のものとは比べて坏部の屈曲が緩く、かつ長くなり、直線的に外反する。次段階の秋根遺跡LD066第1層出土の高坏はさらに坏部が直線的に外反し、深くなる。東部の資料が充実すれば、高坏を指標に西部と東部の併行関係が明らかにされるであろう。

この他、吉永遺跡Ⅲ-東地区SB-5では、伝統的V様式系甕がまとめて出土している(Fig.142-2~6)。底部輪台技法で、右上がりのタタキを施し、内面にヨコハケを施す。布留系甕(Fig.142-7)、高坏(Fig.142-10)は湯田楠木町遺跡出土土器と時的にほぼ併行する土器である。ただし、西部で、湯田楠木町遺跡に併行する資料には倒卵形で平底の伝統的V様式系甕は少ない。本資料は時的に若干先行する可能性もあるが、現段階では湯田楠木町遺跡出土土器とほぼ同時期の資料と捉えておきたい。

弥生時代終末期後半においては、西部・東部とも複合口縁壺・器台は良好な資料がなく、様相は不明である。また、庄内系甕は極めて少なく、吉田遺跡河川跡、綾羅木郷遺跡包含層<sup>27)</sup>、吉田馬場遺跡LD009・010などから出土しているに過ぎない。これらは時的にも湯田楠木町遺跡出土土器と併行するものと考えられる。したがって、現段階では畿内系土器は伝統的V様式系甕のみで、複合口縁壺・器台を除いた在地系土器との共伴関係

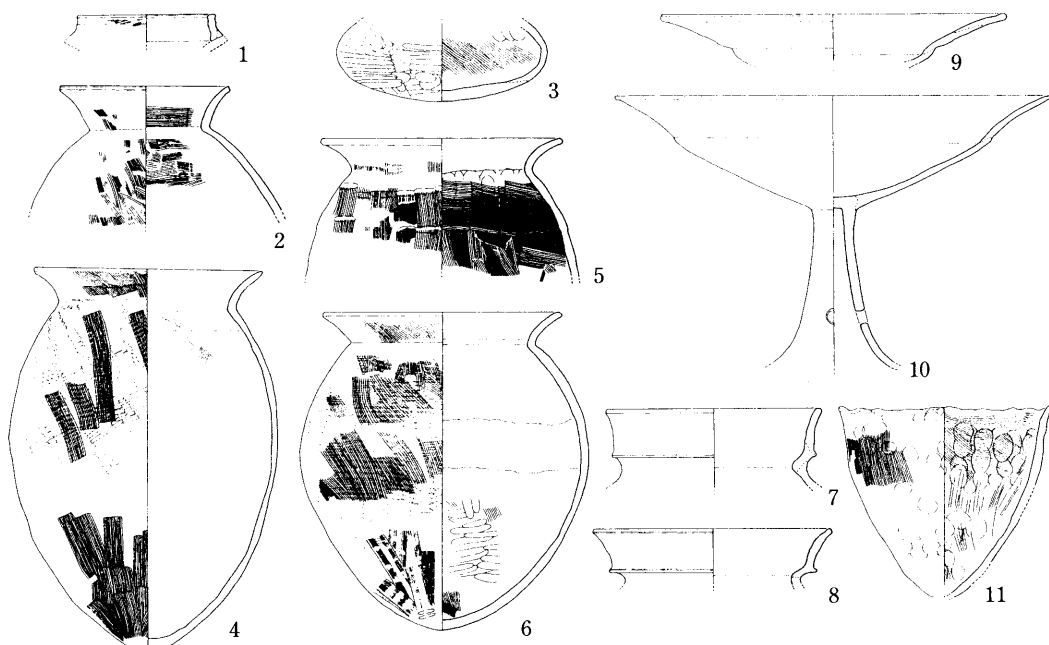


Fig.141 柳瀬遺跡LS005出土土器 (S=1/6)

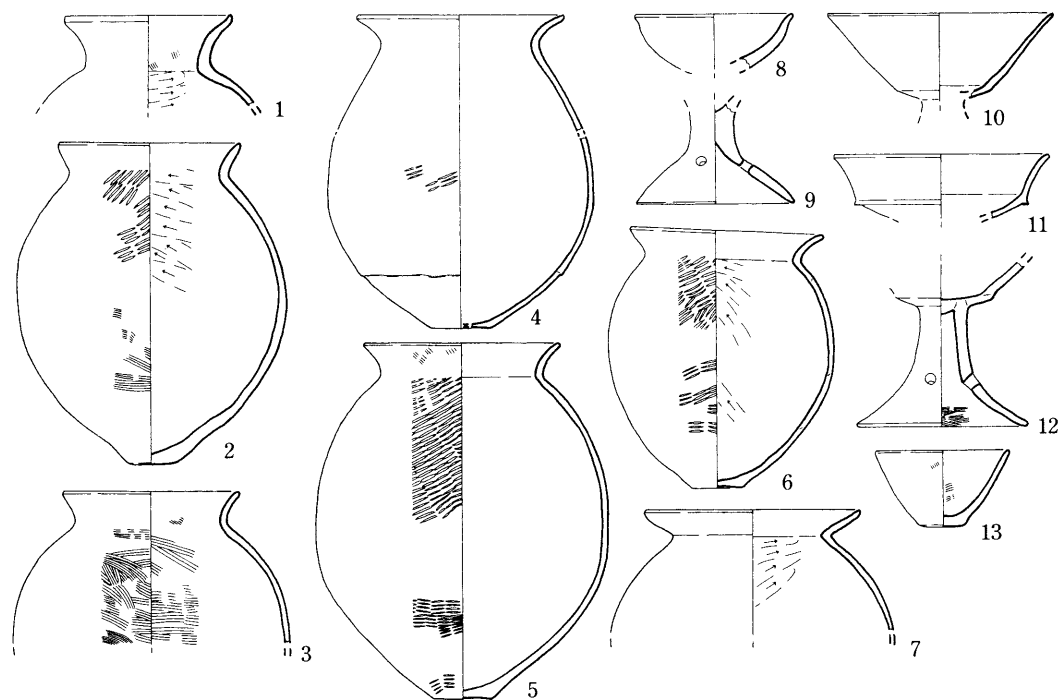


Fig.142 吉永遺跡Ⅲ一東地区SB-5出土土器 (S=1/6)

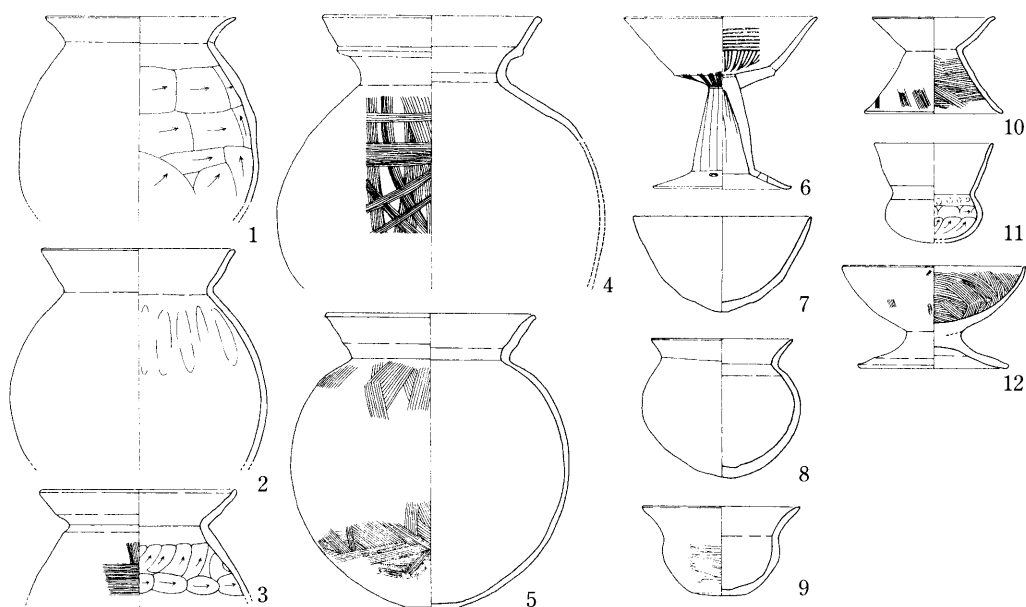


Fig.143 秋根遺跡LK093出土土器 (S=1/6)

しか確認できない。<sup>28)</sup>遺跡によって様相が異なることが予想され、良好な資料の蓄積が望まれる。

湯田楠木町遺跡出土土器に後続するのは、秋根遺跡LK093出土土器である。布留系の脚柱状部が細長く、裾部が短く外反する布留系高坏 (Fig.143-6)、X形小型器台 (Fig.143-10) から、布留Ⅱ式、纏向5類に併行すると考えられる。この間を埋める布留Ⅰ式の後半に併行する良好な資料は得られていない。複合口縁壺の下限は不明だが、恐らくこの前後に消滅するのであろう。甕は布留系甕 (Fig.143-3) のほか、依然として在地系甕が残存する (Fig.143-1・2・5)。山陰系二重口縁壺 (Fig.143-4) は成形・調整とも雑になり、頸部が太くなる。なお、県東部では良好な資料に恵まれていない。

以上の資料から、現段階では吹越式・土井ヶ浜Ⅳ式を弥生終末Ⅰ期とし、柳瀬遺跡E地区LS005を弥生終末Ⅱ期、湯田楠木町遺跡出土土器を古墳前期Ⅰ期とし、秋根遺跡LK093出土土器を古墳前期Ⅱ期と仮称しておきたい。畿内との併行関係は弥生終末Ⅰ期を纏向2類、弥生終末Ⅱ期を纏向3類、古墳前期Ⅰ期を纏向4類、古墳前期Ⅱ期を纏向5類と考えている。詳細については、別稿を準備中である。

## おわりに

以上、湯田楠木町遺跡出土土器を再報告し、加えて、山口県内の弥生時代終末から古墳時代前期の土器について若干の検討を行った。山口県内では弥生終末Ⅱ期に伝統的V様式系の土器が流入し、古墳前期Ⅰ期に至って、布留系土器が流入する。湯田楠木町遺跡出土土器は精製器種を含む布留系土器主体の土器群であり、在地系、伝統的V様式系甕にも布留系甕の強い影響がみられる。本資料は、山口県内のみならず、西部瀬戸内における布留系土器の出現を探る上で重要な一括資料と評価できよう。しかし、この時期を境に消滅していく複合口縁壺や器台など在地系土器の下限については不明な点が多い。また、遺跡によって土器の様相が相当に異なることが予想される。資料の増加と蓄積を踏まえ、今後さらに検討を続ける所存である。

## 謝辞

本稿の内容については、山口考古学談話会、古文化研究会で発表させていただく機会を得た。発表と資料の実見においては、下記の諸先生、諸氏、諸機関のお世話になった。また、挿図のトレースの大部分は鳴谷みね子氏にお願いした。記して感謝申し上げます。

石井龍彦、小田富士雄、河田聡、古賀信幸、久住猛雄、武末純一、乗安和二三、中川寧、村田裕一、豆谷和之、溝口孝司、濱崎真二、藤本有紀、吉瀬勝康、下関市教育委員会、豊浦町教育委員会、山口市教育委員会、山口県埋蔵文化財センター（敬称略）

## [注]

- 1) 内田 悟他『山口市宇楠木町 湯田中学校造成地 湯田楠木町第Ⅰ地区発掘調査概報』（山口市教育委員会、1975年）
- 2) 金関 恕「山口県豊北町土井ヶ浜遺跡出土の弥生式土器」（『弥生式土器集成資料編』、1968年）
- 3) 小野忠熙、山本一郎、乗安和二三ほか『吹越遺跡第2次調査概報』（平生町教育委員会、1972年）
- 4) 小田富士雄・佐原 眞「2 北九州と西部瀬戸内における弥生土器編年」（『小野忠熙編 高地性集落の研究資料編』、1979年）
- 5) 山本一郎『防長の土師器』（『山口県の土師器・須恵器』周陽考古学研究所、1981年）
- 6) 豆谷和之「付篇Ⅱ 吉田遺跡第Ⅰ地区A区の調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅺ』、1993年）  
豆谷和之「196 湯田楠木町遺跡」（『山口県史資料編考古Ⅰ』、2000年）掲載図は筆者原図である。
- 7) 増野淳一編『赤妻遺跡』（『山口県埋蔵文化財調査報告』第132集、1990年）、鈴木 卓編『赤妻遺跡Ⅱ』（『山口県埋蔵文化財調査報告』第154集、1993年）

- 8) 古賀真木子編『赤妻古墳』（『山口市埋蔵文化財調査報告』第67集、1997年）
- 9) 杉原和恵編『神郷大塚遺跡』（『山口市埋蔵文化財調査報告』第38集、1991年）
- 10) 増野晋次編『山口市内遺跡詳細分布調査古敷・湯田地区』（『山口市埋蔵文化財調査報告』第64集、1997年）
- 11) 久住猛雄「北部九州における庄内式併行期の土器様相」（『庄内式土器研究 XIX』、1999年）
- 12) 次山 淳「布留式土器における精製器種の製作技術」（『考古学研究40-2』、1993年）
- 13) 石野博信・関川尚功編『纏向』櫻井市教育委員会
- 14) 豊岡卓之編『纏向』補遺編（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、1999年）
- 15) 寺沢 薫「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」（『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告49、1986年）
- 16) 藤田憲司「山陰「鍵尾式」の再検討とその併行関係」（『考古学雑誌』64巻4号、1979年）この土器については、中川寧氏、久住猛雄氏にご教示いただいた。
- 17) 富士埜 勇編『国道9号・山口バイパス 下東遺跡・萩峠遺跡』（『山口県埋蔵文化財調査報告』第30集、1975年）
- 18) 西田 宏編『吉永遺跡（Ⅲ－東地区）』（『山口県埋蔵文化財センター調査報告』第10集、1999年）
- 19) 水島稔夫編『吉田馬場遺跡』（『下関市埋蔵文化財調査報告』43、1992年）
- 20) 伊東照雄・山内紀嗣編『秋根遺跡』（『下関市埋蔵文化財調査報告』22、1977年）
- 21) 水島稔夫編『綾羅木川下流域の地域開発史』（『下関市埋蔵文化財調査報告』41、1990年）
- 22) 村岡和雄編『下七見遺跡Ⅰ』（菊川町教育委員会、1989年）
- 23) 谷口哲一「新宮山古墳・新宮山経塚」岩崎仁志編『平成6～8年度重要遺跡確認緊急調査報告書』（『山口県埋蔵文化財調査報告』第185集、1998年）
- 24) 山口市上ノ山古墳群の台状墓などが挙げられる。山口県教育委員会『庵河内遺跡・上の山古墳群』（『山口県埋蔵文化財調査報告』第164集、1994年）
- 25) 西田守夫「竹島御家老屋敷古墳出土の正始元年三角縁階段式神獸鏡と三面の鏡」（『MUSEUM』No.357 東京国立博物館、1980年）
- 26) 濱崎真二編『柳瀬遺跡』（『下関市埋蔵文化財調査報告』60、1997年）
- 27) 伊東照雄編『綾羅木郷遺跡Ⅰ』（『下関市埋蔵文化財調査報告』27、1981年）
- 28) 近年、東部でも下右田遺跡17次SL・SM地区SI1048出土土器で在地系甕と伝統的V様式系の甕の共伴が確認されている。原田光朗編『下右田遺跡第9・10・13・14・15・17次発掘調査概報』防府市教育委員会、1999年



Tab.10 出土土器観察表

法量 ( ) は復元値

遺物 番号	器 種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色 調 ①外面②内面	胎 土	概 報 図版番号	概報 写真	注 記	備 考
1	壺 口縁部～胴部	(18.6)			灰白色	1～3mmの砂粒を含む。	第14図-1	有	YK-1 E-4 NO3 740605	
2	壺 口縁部～胴部	(20.0)			灰白色	1～3mmの砂粒を含む。	第14図-2	有	YK-1 E-4 NO10 740601	胎土分析土器
3	壺 頸部				淡黄色	1～3mmの砂粒を含む。	未掲載		YK-1 E-4 NO6	
4	壺 口縁部～胴部	(16.7)			①橙色 ②浅黄橙色	1～3mmの砂粒を含む。	第13図-11	有	YK-1 E-4 NO1	
5	壺 口縁部	(10.8)			淡黄色	1～3mmの砂粒を含む。	第14図-15		註記なし	
6	壺 口縁部	(16.8)			淡黄色	1～3mmの砂粒を含む。	第14図-6		YK-1 E-4 NO7 740529	
7	壺 口縁部	(13.8)			灰白色	1～3mmの砂粒を含む。	未掲載		YK-1 E-4 NO2	
8	壺 頸部～底部		1.8		灰白色	1～3mmの砂粒を含む。	第17図-25	有	YKG-8	土器捨て場でない註記
9	壺 頸部～胴部				橙色	1～3mmの砂粒を含む。	第13図-3		YK-1 E-4 NO16 740531	
10	壺 頸部～胴部				①淡黄橙色 ②灰白色	1～3mmの砂粒を含む。	第13図-1	有	註記なし	
11	壺 口縁部～胴部				①浅黄橙色 ②褐灰色	1～3mmの砂粒を含む。	第13図-5	有	YK-1 E-4 NO4 740531	
12	甕 口縁	(16.2)			①淡黄色 ②灰白色	1～3mmの砂粒を含む。	第15図-7		YK-1 E-5 NO5 740605	
13	甕 口縁部～胴部	(13.3)			淡黄橙色	1～3mmの砂粒を含む。	第15図-4		YK-1 E-4 NO2 740531	
14	甕 口縁部～胴部	(16.0)			①黄橙色 ②浅黄橙色	1～3mmの砂粒を含む。	未掲載か		YK-1 E-4 NO5 740531	
15	甕 口縁部～胴部	(13.8)			灰白色	1～3mmの砂粒を含む。	第15図-10	有	YK-1 E-4 NO4 740531	15-11は15-10の誤り
16	甕 口縁部～胴部	(17.9)			①淡赤橙色 ②灰白色	1～3mmの砂粒を含む。	第16図-3		YK-1 E-4 (IV) 740529	胎土分析土器
17	甕 口縁部～胴部	(11.5)			①灰色 ②灰白色	1～3mmの砂粒を含む。	第15図-15		YK-1 E-4 NO4 740531	
18	甕 口縁部～胴部	(14.0)			浅黄橙色	1～3mmの砂粒を含む。	未掲載か		YK-1 E-4 NO2 740531	
19	甕 口縁部～胴部	(14.2)			橙色	1～3mmの砂粒を含む。	第13図-13	有	YK-1 E-4 NO13 740531	
20	甕 口縁部～胴部	(15.2)			①淡黄色 ②褐灰色	1～3mmの砂粒を含む。	第13図-8	有	YK-1 土器捨場跡	
21	甕 口縁部～胴部	(18.0)			淡黄色	1～3mmの砂粒を含む。	第16図-2	有	YK-1 E-5 NO27～28 740605	胎土分析土器
22	甕 口縁部～胴部	14.4			灰白色	1～3mmの砂粒を含む。	第13図-7	有	YK-1 NO(48?) 740609	胎土分析土器
23	甕 胴部～底部		(1.6)		灰白色	1～3mmの砂粒を含む。	第13図-10	有	YK-1 E-5 NO20 740605	胎土分析土器
24	甕 口縁部～胴部	(17.6)			①浅黄橙色 ②浅黄色	1～3mmの砂粒を含む。	第14図-8		YK-1 G-4 NO6 740531	
25	甕 口縁部～胴部	(17.3)			浅黄色	1～3mmの砂粒を含む。	第14図-7		YK-1 E-4 NO4 740531	胎土分析土器
26	高坏 坏部	20.1			灰白色	1～3mmの砂粒を含む。	第17図-1		YK-1 土器捨場跡	
27	高坏 坏部				橙色	1～3mmの砂粒を含む。	未掲載		YK-1 E-5 740605	
28	高坏 坏部～脚部				①黄橙色 ②黒褐色	1～3mmの砂粒を含む。	第17図-5		YK-1 E-4 NO16 740603	
29	高坏 坏部～脚部				淡黄色	1～3mmの砂粒を含む。	第17図-4		YK-1 E-4 NO12 740601	
30	高坏 坏部～脚部				淡黄色	1～3mmの砂粒を含む。	第17図-6		YK-1 E-4 NO4 740605	
31	高坏 坏部～脚部				灰白色	1～3mmの砂粒を含む。	未掲載		YK-1 E-4 NO13 740601	
32	高坏 脚部				淡黄色	1～3mmの砂粒を含む。	未掲載		YK-1 E-5 740605	
33	高坏 裾部				橙色	1～3mmの砂粒を含む。	未掲載		YK-1 E-5 740605	

山口市湯田楠木町遺跡出土の古式土師器

法量( )は復元値

遺物 番号	器 種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色 調 ①外面②内面	胎 土	概 報 図版番号	概報 写真	注 記	備 考
34	小型高坏 脚部				淡黄色	精良	未掲載		YK-1 E-4 NO10 740601	
35	小型器台 坏部～脚部	9.5			浅黄橙色	精良	第17図-10		YK-1 E-4 NO4 740531	
36	小型器台 脚部		(11.0)		①灰白色 ②浅黄橙色	1～3mmの砂粒を含む。	第17図-11	有	YK-1 E-4 NO14 740603	
37	山陰系鼓形器台 脚部		(18.3)		灰白色	1～3mmの砂粒を含む。	第14図-3	有	YK-1 D-12 E-4-E-3 トレンチVI 740516	試掘時出土土器か
38	鉢 口縁部～底部	(11.8)	2.8	5.9	灰白色	1～3mmの砂粒を含む。	未掲載か		YK-1 E-45 NO38 740604	E-45はE-4・5の誤りか
39	鉢 口縁部～底部	(8.4)	2.7	6.4	淡黄色	1～3mmの砂粒を含む。	第17図-18	有	YK-1 E-4 NO16(1) 740603	
40	小型丸底鉢	(11.4)	1.8	5.1	浅黄橙色	1～3mmの砂粒を含む。	第17図-15		YK-1 E-4 NO16(2) 740603	
41	鉢 口縁部～底部	(6.4)	1.2	3.2	①灰白色 ②浅黄橙色	1～3mmの砂粒を含む。	第17図-23		YK-1 E-4 NO23 740603	
42	鉢 口縁部～底部	(6.3)	2.3	0.5	淡黄色	1～3mmの砂粒を含む。	第17図-22	有	YK-1 E-5 NO30 740605	
43	壺もしくは鉢 底部		0.4		黄橙色	1～3mmの砂粒を含む。	第17図-33		YK-1 E-4 NO6 740531	
44	壺 底部		1.4		淡黄色	1～3mmの砂粒を含む。	第15図-19		YK-1 E-4 NO1 740531	
45	壺 底部		(6.4)		①灰白色 ②灰色	1～3mmの砂粒を含む。	未掲載		YK-1 E-4 NO6 740605	
46	壺もしくは鉢 底部		2.7		①褐灰色 ②灰白色	1～3mmの砂粒を含む。	第17図-35		E-4 NO14 740601	
47	甕 底部		6.3		灰白色	1～3mmの砂粒を含む。	第17図-29		YK-1 E-5 740605	混入ノ弥生時代中期
48	甕 底部		3.2		①淡黄色 ②黄灰色	1～3mmの砂粒を含む。	未掲載		YK-1 E-4 NO7 740601	
49	甕 底部		(4.6)		①淡黄色 ②黄灰色	1～3mmの砂粒を含む。	未掲載		YK-1 E-4 NO7 740529	
50	甕 底部		(2.0)		①浅黄橙色 ②灰黄色	1～3mmの砂粒を含む。	第16図-12		YK-1 E-4 NO10 740601	
51	甕 底部		3.9		①浅黄色 ②黒褐色	1～3mmの砂粒を含む。	第16図-11	有	YK-1 以下不明	

※備考中の胎土分析土器は後に三辻利一氏によって行われたもので、いずれも山口県内のものと推定されている。

文献：三辻利一「西遺跡出土土器の蛍光X線分析」山口市教育委員会『西遺跡』

(『山口市埋蔵文化財調査報告』第21集、1986年)